インタビュー「おこしびとに聞く！」

2018 年 8 月 30 日（木）

サンプル

自宅でできる、知的できれいな仕事

――このお仕事を始めたきっかけを教えてください。

神田　私は 1972 年にテープ起こしの仕事を始めました。それまでは 5 年間 OL として働き、その後、海外技術協力事業団（OTCA）でアルバイトをしていました。でも、朝日新聞の求人欄に掲載されていた「自宅でできる、知的できれいな仕事」というキャッチコピーを目にして、きれいな仕事で知的ってどういうことかなと興味を持ち、試験を受けたのが始まりです。

――「知的で」という部分に惹かれたのですね。

神田　たまたま OL 時代に貿易関係の仕事をしていたのです。そのころはワープロも何もありませんから、部長が海外出張するときは報告書を書くために口述筆記（口頭で述べられた内容をその場で記録すること）をしていました。そんな経験もあって、知的できれいな仕事って筆耕屋さんみたいなものかな、ちょっと受けてみようと思ったんです。

新聞の政治欄と三面とスポーツ欄かな、3 種類ぐらい読まれるのを書くテストでした。

――そんな試験が。

神田　いまだに覚えているけれど、濃厚飼料（ノウコウシリョウ）という言葉を聞き間違えて、農耕肥料（ノウコウヒリョウ）と書いてしまいました。日本語は同音異義語が多くて、難しいと思いましたね。

最後まで起こすことが大事

――音質がよくないときに気を付けていることはありますか。

神田　聞こえない言葉にずっとこだわっていると大変なので、とりあえずそのままにします。その先で同じ言葉を少しクリアにしゃべっていたり、翌朝にもう一度聞くと「何で昨日は聞こえなかったんだろう」と思うこともあります。

1 回目はバーッと聞いて、2 回目で全部起こせたらいいなという感じです。先を聞くことは絶対に大事です。

――何回も聞き直しているんですね。

神田　そうですね。音が悪いときは速くすることが結構あります。

――遅くするのではなく、速くするんですか。

神田　速くすることで結構シャープに聞こえるときがあるので。ただ、知識があったら聞こえているんだろうなと思うことはいっぱいあります。先代社長がいつもおっしゃっていた、「知らない言葉は聞こえない」。

――名言ですね。

逆に、これだけは絶対にやってはいけないと決めていることはありますか。

神田　想像で書いたりしたら絶対にいけないですよね。検索しても分からない言葉は、話者の講演会や論文まで調べています。案件によっては、起こすよりも検索する時間の方が長いかもしれません。

――いかに検索に時間を掛けられるか。

神田　そうですね。私は検索が大好物なので（笑）。

話者が何人もいて分からないときもありますでしょう？　あれは本当に難しくて。出席者が関西弁だったら、出身県を調べるとか。

――そこまでするんですね。

神田　いや、手掛かりですよね。それが必ず合っているとは限らないけれど、拠り所。その辺りが一つのコツかなと思います。その人の名前の脇に、俳優の誰かに似ているとか、べらんめえ口調だとか、そういう特徴も書く。

――地道ですね。

座りっぱなしでエコノミー症候群を発症

神田　あと、発言者が多いときは、なるべく集中して一気に起こすようにしています。途中でやめると誰か分からなくなって、「最初にしゃべった人は誰？」ということになるので。

でもそれで昔、エコノミー症候群を発症して 3 週間入院したんです。そのときも話者が分からなかったんですよね。これは席を外したら駄目だと思ったので、コーヒーとクッキーを置いて朝の 6 時から夕方 16 時くらいまでずっと座りっぱなしでした。それを納品して、さてシャワーでも浴びようかと思ったら、目の前が真っ暗になってしまって。なんか息苦しいなと思って、病院に行ったら「即入院です」と言われ、それで 3 週間。

――大変でしたね。たぶんフットペダルもよくないんでしょうね。

神田　結局、6 時から 16 時の間、あれを踏みっぱなしだったからいけないんでしょう

ね。私は昔から集中しないとできないんです。あまり席を立ちたくないの。時には席を立った方がいいけれど、途切れてまた新しい気持ちになると、話から外れるような気がしてしまって。こんなことしなくても皆さんいい原稿を書いていらっしゃるけれど、私はわりあい集中しないと駄目な方なので。

――座るのも体力が必要ですから、その辺りの自己管理は難しいですね。

神田　座るのが好きではない人は続かないと思う。

カセットテープとの闘い

――神田さんは 1972 年にお仕事を始められて、今年で 45 年目を迎えます。手書き→ワープロ→パソコンと、大きな変化を経験してこられたわけですが、当時を振り返ってみていかがですか。

神田　まさに産業革命ですよね。最初はオープンリール式のとても大きなテープレコーダーで、音源は円形のリールに焼き込むタイプのものを使っていました。それを機械に入れて、一言聞いてはガチャッと手で止めて原稿を書く。この繰り返しでした。

その後、小さなカセットテープになり、今使っているフットスイッチ（SONY BM-76）を使い始めましたが、とにかくテープが絡まるんです。特に 150 分テープは薄いからすぐに絡まって、何度電気屋さんに飛んだか。接着力の強いメンディングテープというものまで買って、切れた箇所を貼りながら作業しました。

――分解するときに、ネジの付いたカセットテープは外すことができるけど、熱で接着剤にようにくっ付いてしまっているものは、バキッと割らないと取れないですよね。

神田　そうそう。だからネジの付いたケースを 2～3 個取っておいて、中身を移し替えていました。絡まったものを直すのも怖くてね。どこでねじれてしまったのか探して、それを直すのに数時間掛かるわけ。もう泣きそうになっちゃう（笑）。直しても、しわの寄ったところはウワンウワンッと聞こえるから大変です。

――すごく精密な作業だったんですね。手書きで起こすのも大変でしたか。

神田　当時、英雄（HERO）という 500 円の万年筆がありまして、それを 5 本くらい買っておくんですよ。私は特に筆圧が強かったのか、ペンの先が駄目になるのね。それこそひと月の原稿が 3000 枚の時代だから、ほとんど殴り書きですよ。ひどい字でしたね。

――その後、1979 年にワープロが発売されましたが、当時は皆さんお持ちだったので

しょうか。

神田　まだワープロが二十数万円のときで、用途がなければ普通の家にあるものではなかったかもしれません。締切に間に合わないと大変だから、大きなフロッピーディスクをカタカタいわせて駅まで走っていました。

校閲者からの学び

――当時は原稿を会社に届けていたんですね。

神田　会社のドアの前で「私はばかなんだ、私はばかなんだ」って２回くらい思ってから入っていました。そうしないと、打ちひしがれて帰ることになる。手書きでしたから、校閲者に「ちょっとここへ来て。この字、どういう書き順で書いてる？」「ああ、だからこういう形になるのね。正しくはこう」と言われて。

でもね、ありがたいことがいっぱいありました。そういうことで学んできたことが多くあったから。きっと仕事が嫌いだったら続けられないでしょうけれど、みんな言われているんだからしょうがないなと思っていました。

――実践を積まれていく中で、ご自身でいろいろと発見していった。

神田　ただ、校閲がゆっくりの人がいて、夕方になってもなかなか終わらないの。ああ、むこうを向いている間にもう１枚いけるのになあ、なんて思って。校閲が終わったら原稿を一枚ずつ取っていくんだけど、「こんなにあるのにまだ１枚……」って。そういう悲しさはありました。

――ひたすら待つんですね。

神田　その人が「うーん、いいこと言ってる」とかおっしゃっているのね。えー、それよりも早く字を見て！　と思って。

――イライラしますね、それは（笑）。

神田　そういうのが一番つらかった。「そうだよなあ」とか言って。

――校閲者はどんな方でしたか。

神田　基本、厳しい方ばかりでしたね。厳しく言ってくれたからこそ、勉強になったこともあります。原稿が真っ赤になって、それを自分で直していたから。今も悪いところがあると戻ってきますが、やっぱり自分で直さないと素通りになりがちですよね。

――興味を持つことと、もっとうまくなりたいという気持ちが大事。

神田　もっとうまくなりたい。でも、極めることはない。

――そういう謙虚な気持ちもまた大切なのかもしれません。当社ではライターと校閲者の2人体制で作業をしているので、これからもより良い原稿を一緒に作っていけたらと思います。

本日はありがとうございました。

サンプル